

自著と
その周辺

視診・触診でわかる内科疾患の診かた

金原出版

210頁

2010年

総編集 池田修一

編集：伊東文生，川合眞一，代田浩之，福嶋義光，松岡 健

定価 5,000円(税抜)

内科医の本質は、患者さんの身体の内側に巣くう疾病を“聴く・視る・触る”の三感で正確に診断することである。それゆえ内科医は、常に患者さんから情報を詳細に収集して、自ら考えようとする姿勢を持つべきである。しかし、昨今の画像診断の驚異的な発達により、ともするとこうした内科医の本来あるべき姿がかすんでしまった感がある。また、臓器別診療体制の普及によって、最近は臓器を診ても患者さんの全身を診ない内科医が増えつつある。実際、臨床実習または臨床研修で回ってくる医学生や研修医と一緒に外来診療を行っている時、問診、身体所見を十分にとらずに画像検査を申し込んでしまう姿を時々目の当たりにする。

これを解決するためには、いま一度内科診断学の重要性を医学生、若手医師に認識してもらう必要があると痛切に感じ始めた頃、金原出版から内科診断学に関する書籍執筆のお誘いをいただいた。しかし、自分が専門とする神経内科、リウマチ・膠原病内科を含めて、いわゆる内科診断学を記述した名著は既に複数あることから、当初はお断りした。実はその頃、恩師である柳澤信夫先生が「教科書を書くのは現役の教授がする仕事ではない」とおっしゃっていたことが頭の隅に焼き付いており、教科書を執筆することに自分なりの抵抗感があった。裏返せば「自分は研究をバリバリ進めているぞ!」といった自負を持っていたのかもしれない。その後、この件は心の中に曖昧模糊として残っていたが、教授職が10年目を過ぎた頃、平日頃、回診の場で論議している患者さんの情報を文章にして残すことの意義を感じるようになった。また、尊敬する先輩教授から「良い教科書を書くことも教授としての重要な仕事です」とのお言葉をかけられた。そこで実地臨床に即した形で、症例提示を介して問診，“視診・触診”の重要性を理解していただけるテキストの作成を企画した。そして自らも症例の執筆を行うと同時に全編の編集を担当した。

幸いなことに5名の臓器別編集担当の先生方にも加わっていただき、内科の広い領域をカバーする症例提示をすることができた。当初は“信州大学版内科学”を想定して、学内の他の内科系教授の協力を得ようとしたが、出版社側から都内の私立医大の教授を編集者に入れないとテキストが売れないとの強い助言を受け、この目論みは断念した。症例の選択に当っては日頃よく遭遇する疾患に加えて、比較的稀な疾患ながら一度勉強しておけば実際に経験したごとく印象に残る疾患も含めた。また、症例解説の項では疾患の成因、病態生理、治療法に関する内容を要約し、これらに関連する組織像、画像所見なども多数掲載した。さらに疾患の最新情報をワンポイント・アドバイスとして記述した。提示した100症例の内、半数以上が第3内科の病棟で過去に経験した患者さんであり、執筆者として協力してくれた教室員には心から感謝申し上げる。振り返ってみればテキストを一冊書き上げることは大変であり、中でも一番苦労したことは用語の統一であった。専門外の領域の教科書と用語集を頻りに参照したことで、私自身が最新の内科学の知識を得たといえる。

最後に本書が医学生や研修医のみならず、内科の専門研修を受けている若手医師にも有用であることを願って筆を置く。

(信州大学医学部内科学第3講座 池田 修一)